「教職員未配置」解消と「賃金」改善について

福岡県教職員組合　浮羽三井支部で支部長をしております。古賀です。今回は意見発信の機会をいただきありがとうございます。私は「教職員未配置」と「賃金」について意見を述べたいと思います。

本県における教職員未配置の状況は、先ほど後藤支部長が述べたとおりですが、私からも、より具体的な学校の現状について発言させていただきます。

私の支部の、ある中学校では、特別支援学級が３学級ありますが、そのうちの１学級の担任が４月の途中から病休に入り、現在も休職しています。だからその学級の生徒をそのままにしておけないので、その学級の生徒を残りの担任２人で担当しているとのことです。本来、代替の講師が来るべきところですが、今現在も、代替の講師は来ず、そのままの状態です。

担当する生徒が増えることで、その分、業務は増えます。そのひとつの例としては、自分が本来担当している生徒を授業の中だけでは、時間がたりないので、昼休みにも支援学級に呼んで、宿題の点検などをしなければならず、休憩時間はないそうです。休憩時間と言えば、話は少しそれますが、私も支援学級を担当していますが、一人の生徒は教室に入れないので、給食も、昼休みも支援学級で過ごしています。よって、私の休憩時間はありません。

「生徒がいるから」「生徒のために」と私たちは、そこに生徒がいればそのままにしておけないので、結局、引き受けてしまいます。では、せめて校務分掌を減らして負担を減らすなどの措置がとれればとも思えますが、そのようなことを考える管理職はいないし、もし、それができたとしても他の先生たちにその負担を負わせることになり、職場の人間関係に悪影響を及ぼすことも考えられます。

このような「教職員未配置」の原因は「教師不足」です。これを早急に解決していくことが求められているのは、重々承知のことと思いますが、現在、進められている、またはこれから始まろうとしている文科省や県教委の「教員不足」に対する取り組みでは、「教員不足」は解消されないと考えます。

なぜならば、「定年退職」年齢前後の高齢層教職員に対して、「65 歳まで安心して働いてもらう」、言い換えれば「退職（離職）防止」の取り組みが全くと言っていいくらいなされていないと思うからです。少なくとも、私はそう感じています。

これからの学校教育を担っていく若年層の教職員を確保しようという文

科省や県教委の考えには、一定の理解を示します。しかし、今の学校現場の問題の一つは、豊富な経験や知識を持ち、若年教職員にアドバイスをするような、職場の下支えをするはずの高齢層教職員が、多忙な現状に疲れ果て、働く意欲（モチベーション）を保てなくなっているということです。結果的に、定年退職の年齢を待たずに、「退職（離職）」を選択してしまいます。

学校が直面する課題の多様化・複雑化を背景に、子どもたちが抱く不安感や不満感への対応、または「ゆたかな学び」の素地となる集団づくりなどが難しくなっている中、高齢層教職員が持ち合わせてる豊富な経験や知識は、かけがえのない財産です。

そのような高齢層教職員の「退職（離職）」が喫緊の課題であることを、文科省や県教委は理解してあるのだろうかと疑問に思います。一度「退職（離職）」した方に声をかけて、もう一度、学校現場に戻ってきてもらおう…などといった、学校現場の問題の本質を理解しない取り組みでは、全く解決しません。なぜなら、現在、そのような形で働いてくださっている方々は、もともと学校業務の多忙さに起因する理由で「退職（離職）」されている方が多く、復職をお願いしても「授業だけなら…」と、仕方なく引き受けてくださっている方も少なくないからです。

現職の高齢層教職員においても、「賃金が減らされて、業務が減らないなら、やる気はでない。責任は一緒だし。」や「この仕事、賃金が減った自分がやるのはおかしいよね。」といった、同僚性を破壊するような生々しい声が、職員室の中で実際に聞かれる状況です。これでは、若年層教職員にも「将来への不安」を抱かせてしまい、そうなれば、若年層の「退職（離職）」も加速してしまうのではないかと危惧してしまいます。

人員を確保するためには、やはり学校全体の業務量を減らすと同時に、60歳を過ぎて減らされる賃金の改善や高齢層教職員の賃金改善を早急に行わなければ、学校現場の疲弊に歯止めはかかりません。このような「取り組み」を早急に実行し、その成果を発信することが、今、現場で奮闘しているすべての教職員、そして、これから教職をめざそうとしている方々の「安心」につながると思われます。

私が意見発信をするということを仲間に話すと「１馬力でも家族４人を養えるだけの賃金が欲しいと意見を言ってほしい。」と言われました。

物価はどんどん上昇する。しかし、同じように賃金は上昇せず、多忙化は変わらない。現場で踏ん張って頑張っている教職員の士気があがるような賃金水準への改善を要求します。　　以上で終わります。